



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中国朝鮮族出稼ぎ労働者の性格と母村の変化：韓国への移動を中心に〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	李, 雪蓮
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(農学)
Dissertation Number	甲第13268号
Issue Date	2018-06-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/71214
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Li_Xuelian_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学 位 論 文 内 容 の 要 旨

博士の専攻分野の名称: 博 士 (農学)

氏名 李 雪蓮

学 位 論 文 題 名

中国朝鮮族出稼ぎ労働者の性格と母村の変化 —韓国への移動を中心に—

中国朝鮮族は、朝鮮半島から中国東北部へ移民した人々が、本国が日本から解放されて以降も中国に継続して居住し、国籍を取得して認定された民族である。主に東北部に多く分布し、稲作の発展に寄与しながら、農村部の中堅として活躍してきた。およそ 50 の朝鮮族自治郷が設立され、その下に朝鮮族単一ないし一部漢民族と混住する村が形成されてきた。

しかし、中国では、1970 年代末から国内体制の改革および対外開放政策が行われ、農村地域の住民は経済発展する沿海部の都市などへ出稼ぎするケースが増加している。また、韓国との国交樹立を契機として、多くの朝鮮族農民が韓国への出稼ぎを開始し、それは継続している。

本論ではこの朝鮮族に焦点を当て、1990年代以降における中国朝鮮族の国内移動と韓国への移動の出稼ぎ像を示し、そのことが母村に及ぼす影響を明らかにすることを課題としている。労働力移動に関する制度や統計的整理にも力を入れたが、方法的には韓国で1年以上にわたり中国朝鮮族の参与観察を行い、合計 50 名に及ぶ出稼ぎ労働者のデータを蓄積し、議論を行った点が本論の特徴である。

第1章では、まず朝鮮半島から中国東北部への現朝鮮族の移住の経緯を前提的に述べる。そのうえで、中国全体や事例として取り上げる吉林省における農村からの出稼ぎの概況を示し、第3章で事例とする 50 名の中国国内での出稼ぎの経緯を明らかにしている。

第2章では、韓国における外国人労働者の中でも圧倒的に多い朝鮮族の出稼ぎ労働者を中心に、その受入政策の背景とその内容を整理し、政策変化の要因を分析し、現在の到達点を示している。韓国の経済急成長に伴う労働力不足問題の緩和のために、韓国では産業技術研修制、就業管理制、雇用許可制、訪問就業制など外国人の労働力受入政策を順次導入している。こうした在留資格制度の緩和の下で、中国朝鮮族はより安定した身分で働けるようになった。訪問就業制度の導入は、当初の研修生身分から雇用形態へとかじを切ることで外国人労働力導入を本格化し、不法滞在者を払しょくすることができた。なかでも、朝鮮半島を母国とし言語も同一である中国朝鮮族は最も労働力として適切であった。就業先は国内労働者保護のために制限され、労働力不足の建築業、製造業、サービス業が対象とされ、なかでも中小規模企業への就業が奨励された。朝鮮族の出稼ぎ労働者はこのような制度に適応しながら、自らの出稼ぎ希望を満たしつつ、2016 年には韓国経済活動人口の 2.4%を占めるまでになった。

韓国側の外国人労働力の受け入れ政策が進む中で、朝鮮族はどのような動きをとったかを第3章では検証している。50 名の朝鮮族の出稼ぎ者を事例として取り上げ、韓国出稼ぎにおける滞在資格の変化、就業、生活、福祉等の実態を整理し、出稼ぎパターンの類型化と今後の方向性を明らかにしている。約 20 年間にわたる韓国出稼ぎが進む中で、就業、居住環境と法的地位は大きく改善されたが、現在の出稼ぎ者は 20 歳台から 70 歳台までと年齢層が広がっている。その結果、隠居者から児童までの滞在者がおり、家族単位でのマイグレーション現象が見られた。その移動状況を上述の視点から定住者、リターンマイグレーション、一時的なマイグレーションの 3 種類に区分している。

このような朝鮮族の韓国への出稼ぎは、中国東北地方の母村のコミュニティそのものを喪失させるような移動現象を示している。その結果、離農跡地が賃貸に出され、比較的大規模な漢民族農家が成長を見せるなど、農地流動化による影響がみられる。そこで、第4章では、朝鮮族の離農跡地の賃貸借関係がどのように形成されているかを朝鮮族集落の形態に即して明らかにし、放出された農地を集積する借地農家はどのような性格を持つかを示した。その性格をみると、まず朝鮮族と漢民族が混在する村での農地は村内構成員への貸付が多いが、朝鮮族単一の村の農地はほぼ全てが村外への貸し付けとなっている。前者では村内構成員への一括賃貸方式で貸付する傾向がみられ、借地料水準とその徴収の安定性は後者を上回っていることが明らかになった。借地農家の規模は、朝鮮族単独の村の方が大きくなっている。また、5haを超える農家は専門的性格が強く、5ha未満の農家は経営主または家族構成員の兼業が多くなることが明らかとなった。

終章では以上を要約するとともに、中国朝鮮族出稼ぎ労働者の性格と母村の変化を整理している。これまで見てきたように、朝鮮族の韓国出稼ぎは受入れ先、送出元、移動主体である朝鮮族自身において様々な影響をもたらしている。

まず受入れ先である韓国側においては、朝鮮族の韓国出稼ぎによって労働力不足を補填してきた。特に韓国労働者が忌避する3D産業において労働力を補填し、朝鮮族は今日の韓国労働市場において重要な存在となっている。このような労働者の存在の背景には、韓国側が労働力受入規制を緩和し、一部の労働者には永住権を認めていることがある。現在、彼らは従来の3D産業への就業だけでなく、安定的な事務職に就業し、あるいは自営業を営み、就業範囲と立場を向上させている。

一方、送出元である中国の東北農村部では朝鮮族の不在化による深刻な農村空洞化現象が起きている。新中国の成立とともに、朝鮮族の大多数は東北地方の農村地域に集居し、主に営農活動を行ってきた。しかし、彼らの中国沿海地域や韓国への出稼ぎ、移動によって、朝鮮族を構成員とする村では農地は賃貸に出されている。事例として取り上げた村では、空き屋の増加と村民の不在により、単独の村としての存続が困難になり、隣接する漢民族の村に吸収合併されている。中には完全に住民不在になった村民小組もある。

こうした出稼ぎ者は農地の耕作権は保有しているものの、農作業にほぼ関与しておらず、中国各都市での就業や韓国への出稼ぎを繰り返している。その後、韓国に定住化したもの、中国に帰国し都市部に定住するものもある。この朝鮮族出稼ぎ者を定住者、リターンマイグレーション、一時的マイグレーションに区分したが、農地に関しては共通して貸出しをしており、ほぼ放置状態にある。

出稼ぎ移動、移住の主体である朝鮮族はコリアンドリームをもって故国へ向かったが、当初は不法労働者としての存在が多数を占めた。現在は滞在資格が緩和され、少数の定住者を除き、出稼ぎを繰り返している。現在、彼らは韓国政府から「同胞」と承認されるものの、実質的に外国人労働者として位置づけられ、「よそ者」扱いされている。一方の中国でも生活、仕事の主な舞台だった農村地域を完全に離れ、農地耕作権だけ保有している。そして、中国の大都市に居住するものは漢民族に同化され、アイデンティティーを喪失しつつある。

一方では、彼らは元の生活の場を離れ、中国の沿海地域や韓国へ移住するなかで、新しいネットワークを築き、朝鮮族としての帰属感を維持することにも努めている。彼らは中国で生まれ育ち、中国の教育を受けたが、一方では韓国に血縁者を持ち、憧れを感じ、出稼ぎ生活を繰り返している。その期間中に、彼らは中国と韓国という違う二つの社会に同時に帰属し、両方の影響を受けつつ、どちらにも完璧に帰属しない「境界人」の生活を過ごしている。その過程で、住居地と職場は頻繁に変化しており、新しい共同体が生まれる一方、元の農村共同体は消滅しつつある。しかし、その連帯感は必ずしも強くなく、中韓両国の人波の中に埋没しつつあることが懸念される。